



第 45 号

発行日：令和5年10月17日
発 行：一中地区市民委員会
編 集：文化広報部会
事務局：一中地区公民館内
T E L：029-821-0104
世帯数：10,464戸
人 口：20,531人
(令和5年9月現在)

こどもの広場

ぼくと野球

中央二丁目
土小六年

高橋宗一郎

ぼくは小学校一年生から土浦オールスターズで野球をやっています。

ぼくは本当に野球が好きで、面白くて続けています。そして今は土浦小学校地区の野球チームである土浦オールスターズのキャプテンをしています。

キャプテンとして、チームのみんなが仲良くできるようにたくさん話をするようにしています。

野球をはじめた頃は体が小さくて、買ってもらった青い一番小さなグローブも大きく感じました。バットも重く感じたけど、六年生は体が大きくなってぼくのバットをおもちゃのように使っていてすごいなと思いました。

初めて試合に出してもらえた時は、代打で出してもらえました。すごく緊張しました。少しずつ試合にできるようにって、はじめは外野(ライト)でした。

今は人数が少ないのでピッチャー、

キャッチャー、内野と色々なところをやっています。ぼくが、野球で得意だと思っていることは盗塁です。それはチームの中でも誰にも負けない自信があります。

強いチームが多い中、試合に勝つことができることもうれしいです。

もちろん、負けることがあります。その時は、悔しい気持ちになります。

監督からは追加点を取ること、点を取られないようにおさえる事、どっちが簡単か？ それは点を取れないようにすることと教わりました。だから、守備がうまくなるように練習をもっと頑張りたいと思うのです。でも、野球はチームでのプレーでぼくだけが上手になってもダメ



で、その上手さをみんなと一緒に高めていかないといけないのです。だから、みんなと話をしてチームプレーがよくできるようにしています。

練習の日以外でも、チームのメンバーと一緒に遊んだりしています。違う学年の子とも仲良く遊ぶことができるようになりました。

昔は電車が好きで、電車の運転手になりたかった。だけど、今はプロ野球選手になりたいと思うようになりました。

来年からは、卒団して中学生の新しいチームで野球を始めます。

土浦オールスターズで教えてもらった野球の技術はもちろん、あいさつや会話の大切さ、相手を思いやること、野球は面白いという気持ちを大事にします。

初めて試合に出たときの緊張感や気持ちを忘れずにこれからも野球を続けていきたいと思っています。

私にどうして合唱団では？

港町三丁目

土浦二小六年 渡辺 爽花

私は、土浦第二小学校の合唱団の団長をしています。

合唱団は、現在四年生から六年生

までの団員四十一名が、七名の先生の指導のもと、活動しています。合唱団は、主に平日の休み時間や放課後、土曜日に練習をしています。校内での演奏やコンクールに向け、みんなで力を合わせながらがんばっています。歌や発声練習はもちろん、筋トレなど体づくりもしています。

私が合唱団に入った年は、新型コロナウイルスのえいきようでコンクールはできたものの無観客となっていました。しかし、今年是有観客となり、一般の方々にも歌声をきいてもらうことができ、うれしかったです。



NHK全国学校音楽コンクール
茨城県大会 8月2日小学生の部（金賞受賞）
ひたちなか市文化会館にて

合唱団は、私にとって宝物です。歌でたくさんの人を笑顔にしたい！

そんな気持ちを胸に、これからたくさんの人々を笑顔にする歌声を届けていきたいと思っています。

初めての祭り

中央一丁目

土小六年 小林 ゆい



二年前の夏、私は中央一丁目に引っ越してきました。新型コロナウイルスの流行で中止になっていたさまざまなイベントが今年から再開され、今年の夏、私は初めて町内のお祭りに参加しました。

みなさんでお揃いのダボシャツを着用し、山車を引きながら半日かけて町内をまわりました。立派な山車は

とても誇らしく、伝統あるお囃子会の方々の音色・踊りはいつまでも見ていたくなるもので、とても素晴らしいかったです。山車引きの後には青年会の方がお神輿を担いでいました。お祭りの日はいいお天気で暑く、とても疲れましたが、お祭りに参加したことにより、町内の色々な方達と交流することができ、中央一丁目の一員になったと感じました。次のお祭りは二年後、また参加することがとても楽しみです。

弓道を学んだこと

桜町四丁目

一中八年 竹中 廉

私が弓道を始めて一年が過ぎましたが、始めた当初は弓道という新しい世界で何も分からず不安な事ばかりでした。武道であることから礼儀はとても重要であり「礼に始まり礼で終わる」「謙虚な姿勢」という言葉や、常に意識し感謝を忘れず生活しようと思いました。

最初は不明なことばかりなので、先生や先輩が仰っていた事をまずは一番に覚える、身につけていないところは出来るよう頑張る。褒められたことは素直に喜び、褒められ

たからといって完璧という訳ではないので、うまくいった時こそもう一段頑張り上達する。を元に日々練習してきました。

そうした結果、嫌にならず続けられ今では弓道が大好きで部活が楽しみになり、「明日部活があるから頑張ろう」という気持ちが出るようになり、日々前向きに生活することが出来ています。

他の人の射型を見て良い点は取り入れ、悪い点は自分もそうならないか確認してもらい改善、SNSでレベルの高い弓道の動画を見て、今の自分の射との相違点を見つけ、より良い射になるよう勉強をして実践し、どうしたらそう引けるのか創意工夫をし練習を重ねてきました。けれど弓道は思った通りにいかなくとも難しい競技です。そこを仲間と互いに支え合い上達することも良いところだと思います。



そうした結果、県南大会、県大会の団体選手に選ばれ、県大会では六位に入賞し関東大会に出場することが出来ました。

関東大会は他の大会より一層レベルが高く、他県との交流もありとても良い経験になりました。

これからも続けていく上での目標は、九年生も引退し次は私達が弓道部を引っ張っていく立場です。

先輩がいなくなつたので不明な部分も出てくると思いますが、「先ずは自分で考え行動する」ということを意識し、諦めないで充実した良い弓道生活を送っていきたいと思っています。



地域とともにある
学校として

土浦第二小学校 校長
稲生 文子

本年度から、土浦第二小学校も学校運営協議会を設置し、いわゆるコミュニティスクールになりました。保護者や地域住民の代表である委員の方々と、学校運営に関して率直に意見を交わし、より一層の連携・協力体制を築いていきたいと

思っています。

これまでの約三年に及ぶコロナ禍は、学校運営や教育活動の在り方に大きな試練を与えましたが、同時に、柔軟に変化するための気づきも与えられたと感じています。「宿泊学習や授業参観は、コロナのために中止にする」という苦渋の選択をしていたことが、時間の流れとともに、学びを止めないために「どうすればできるか」という思考に変わりました。今では働き方改革も関係しているため、「運動会や音楽会などの行事を、工夫改善して復活させる」取り組みが求められています。たつたの三年でこれだけの変化をしたわけです。今の子供たちが担う将来の世の中を



想像すると、大きな責任を感じます。予測不能な時代であっても、世界を相手にたくましく生きていく子供たちの育成が求められていることが、本当によくわかります。校長として、土浦二小ならではの役割を常に考えさせられますが、「子供たちも教職員も、明るく生き生きとした学校づくり」をしながら、その責任を果たそうと思っています。

今ではコロナ禍が一段落し、対面や直接交流の機会が増えました。そのおかげで、学校への変わらない期待と支援をしてくださっている方が、本当にたくさんいることを実感することができ、嬉しく思います。学校の主役は子供たちですが、学校は、通っている児童のものだけではなく、通わせている保護者にとっても大切な存在です。また母校である後援会の方や学区に住む地域住民の方にとっても、同じように大きな存在です。コミュニティスクールになったことで、土浦二小を大切に思う方々とさらに力を合わせ、未来に向かってたくましく生きる子供たちを育んでいきたいと思っています。



特別な環境でも
身につく力

土浦第一中学校 校長
菊地 正和

約三年半にわたる「コロナ感染ウィルス対策禍」の特別な学校運営が一定の区切りを迎えました。今年度学校は、「配慮を継続しながらも、必要な教育活動は順次再開する」という考え方をベースに、対策禍で得た新しい取り組み方（通信機器の活用による諸活動の効率化、慣例的な行事運営の見直し等）をさらに積極的に取り入れながら、子どもたちの健全な育成のために有効な諸策を推進するよう、スタートしています。

そのような中、夏季休業中に、広島平和記念式典の開催に伴い開催されている「原爆と人間展」を拝見しました。その中の「コーナーとして、昨年度の式典に「土浦市中学生平和使節団」として参加した各中学校の代表生徒と主催者・出席者との座談会がありました。

参加した中学生は現在の9年生。中学校生活のほぼすべての期間を感染対策禍で過ごし、様々な制約を受けてきている世代です。学校生活の

中で日常的に体験するはずの「人と接する、人と語り合う、みんなで行動する」という基本的なコミュニケーション習得の機会をことごとく制限されてきた子どもたち…このような機会に参加して、物怖じせず（おそ）に自分の考えをうまく表現できるのか、積極的に対話に参加できるのか、心配しながら出席しました。



しかし、そんな心配は杞憂に終わりました。彼らは広島平和記念式典に参加して感じた平和への恒久的な願いを、それぞれが感じたままに熱く語ってくれました。そして互いの考えをよく聞き合い、共感し、補足し、自分の将来の夢とも重ね合わせながら、言葉にしていました。「反

戦と平和希求の思い」という大きなテーマに対して、語り継ぐ世代の人となつて素直な言葉で真剣に語り、一般参加者の方々にも感動を与えてくれたと思います。私も感動しました。そして「きちんと話せるのか」などという無用な心配をしていたことを大いに反省したのです。

特別な環境の中で何かが制限されていても、子どもたちは日々の生活の中で必要なことを学び、必要な「力」を身につけてきています。災い転じて…今後の「新しい生活」にも大いに期待したいと思います。



夜空の花火を見て思うこと

穴塚町 内山 賢昇

八月に入り、一中地区市民委員会より、一通の手紙を頂きました。内容は広報誌『みんなの広場』に掲載する文章の依頼でした。お寺の住職である私にとって八月は目が回るほどの忙しい月であり、お断りしようかなとも考えていた矢先に、息子から「今日は長岡花火の日だよ、一緒

にテレビを見よう」と声を掛けられた。思えば十八歳で進学の為に上京して以来、郷里の長岡花火に思いを馳せることはありませんでした。

僧侶の資格を頂いて、実家のお寺で修行している時期に、畑の中のお気に入りの場所から眺めた事もありましたが、花火に対しての思いは今まで忘れ去っていました。

現在、私は縁あつて穴塚で奉職させて頂いております。市町村合併前の長岡は土浦と同じ人口規模であり、田畑の彼方に筑波山に良く似た弥彦山が望めました。土浦に移り住んだ初めの頃、田畑が広がる町並みは、どこか懐かしい感じのある印象でした。

しかもこの町には花火大会があると聞き及び、また花火を毎年眺められると嬉しくなった事を思い出します。長岡の花火は眺めていると気持ちがちが少し引き締まり、祈りの気持ちが始まり、この花火の起源は、伝えによると明治初期の町興しの為又は、戊辰戦争の慰霊のためと伝えられておりますが市民にとって第二次大戦での犠牲になられた方々の慰霊と、戦後の復興への決意が込められている花火です。このことは子供の時に母から度々教えられ

て来ました。

更に近年の中越地震からの復興と、未だ収まらない紛争や戦争に対するの平和への祈りが込められているからこそ、気持ちが引き締まるのだと思います。

私の母は生前、「三尺玉花火」は戦争の思い出が蘇るから苦手なのよ、と話しておりました。確かに打ち上げ前には街にサイレンの音が響き渡り、直径六五十メートルの巨大な花火が開くとともに、お腹に響く轟音。八月の二日三日に合計二万発の打ち上げる音は、戦時中の爆音を思い出すのでしよう。

しかし夏の夜空に広がる花火は、美しいものです。中越地震復興から始まった花火「フェニックス」これは信濃川の土手沿いニキ口にわたって打ち上げる花火で、忙しいうちに色々な花火が打ち上げられ、大空



に置かれた万華鏡を覗いているような花火達です。大人となった私にとって、夏の楽しみと共に、忘れてならない先人への感謝と平和への誓いが、キラキラと輝く一粒一粒に表されている事を思うと、これからもずっと続いてくれるように祈らずにはおられません。

さて、間もなく十一月四日「土浦花火大会（競技会）」が桜川河川敷で開催されます。新型コロナの蔓延前は田んぼの道が観客の車のテールランプで赤く染まりました。土浦の花火は直ぐ近くまで行つて眺められ、花火の光でみんなの顔が明るく照らされ、珍しい花火が咲くと二斉に歓声が上がる、競技会ならではの良さがあります。

各地の花火師の時間と労力の結晶である土浦の花火が間もなくと思うと、心が弾むのを感じます。夜空に輝く大輪の花々に込められた様々な思いを皆で分かち合つて観たいと思います。土浦花火の益々の発展に願いを込めて。

「今年はお祭りやるの？」

虫掛町地区長 田中 成実

今年はお祭りどうなの、町内の方々

からの四月頃の挨拶言葉でした。

町内には虫掛神社があり由緒沿革をたどれば、鵜萱葺不合尊（うがやふきあひずのみこと）を祭神とし安産の神とされてきました。子孫の繁栄と五穀豊穡を願い祭神としたと考えられます。又、平将門の乱の折、叔父である平良兼が将門に攻められ、この神社の藪影に隠れて命びろいしたと言う伝説も残っているそうです。

その神社も平成十年八月六日未明にかけて、不審火により火事になってしまいました。その後、神社拝殿建設の運びとなり現在に至っています。

「祭実行 七月十五・十六日」

今年は三年間行われなかった夏祭りお神輿が神社から町内を練り歩く



祭礼の復活です。御神輿担当中学生、山車担当小学生。祭りの中心は小学生三九名、中学生一八名の父母達の育成会が進めています。

近年は車の交通量が非常に多く、防犯面に一層の注意が必要な状況でしたが、安全パトロール・自主防災・協議員・町内協力者の方々に参加協力いただき、終始一貫しての安心安全な巡行ができ、御神輿も無事に神社に納められました。

三年間実施できなかったことで、今年区長を担った身として、不安な思いもありましたが、元氣すぎる気迫の御神輿、山車の掛け声、お囃子を迎える町内の方々の笑顔を通して、この祭りを事故なくご協力いただいた関係者のみなさまへ、心より感謝申し上げます。

まさに町内を思う老若男女が丸となった結束力の二日間であったと感じました。

今年の夏 高校野球から



穴塚町地区長

佐野 仁

「受験生ブルース」ラジオの深夜放送をかじりついて聞いていたのが

今から半世紀前になります。作詞・作曲・歌っていたのは、高石友也（現在はともや）さん。今も現役としてコンサート活動をおこなっています。

甲子園で校歌が流れ、作詞・作曲に高石さんの名前が映し出されました。大雨のため、試合が中断となる中でのブラスバンドと応援団による演奏で話題になったクラーク記念国際高の校歌です。歌詞の一節に、この場所での出会い心を一つにする旨のフレーズがありますが、人が育つのは、家庭や親ばかりではないということ伝えてるように思います。

さて何よりも忘れてはいけないのが土浦日大高の大躍進です。専大松戸高を大逆転した打撃力や、優勝した強力打線の慶応高を2点の最少得点で抑えた守備力にも驚きました。その若人たちが、私たちの暮らしている土浦であることを誇りに感じるのは、多くの方々の思いだったと思います。

応援メッセージを電光掲示板に流し続けた駅職員の方々、土浦駅到着を待った多勢の人々と心のこもったセレモニーなどに、土浦日大高校野球部は十分に応えてくれました。

今年の夏の甲子園では、木内監督

が率いた取手二高が優勝したことや茨城の高校野球に長く携わった持丸監督のこと、そしてK・Kコンビなども話題に上がり、大いに盛り上がりました。加えて私にとつては、人との出会いの中で育っていくときに地域社会が果たす役割の大切さも改めて感じることもありました。

冒頭の高石ともやさんのことですが、ザ・ナターシャセブンでも活躍したことを知っている方もいるかと思いますが。その代表曲「街」では、この街が好きなのは、あなたとその微笑みがこの街に存在するから（意訳、とあり、私たちに人と街と人々のつながり、その大切さを想起させてくれます。様々な方との出会いやつながりを、今一度大切にしていきたいと思っています。

夏祭りに先達を想う

蓮河原新町地区長 成島浩二郎

七月二十九日、三十日の両日、蓮河原地区（蓮河原・蓮河原新町・滝田）の夏祭りが、猛暑の中、盛大に行われました。子どもたちが引く山車屋台に獅子舞のお祭りです。

ファイナーレの夜、ライトに浮かび上がる山車で、お囃子に一生懸命な



子どもたちは実に楽しそうでした。沿道にはそれをやさしい笑顔で迎える大勢の人たち。

感激でした。獅子に頭を噛んでもらう喜びおばあちゃん、邪気を食べてくれるそうです。祭りを支える霞会、育成会、町会お手伝いの皆さんのご尽力に深く感謝です。

蓮河原新町に住んで四十年になります。去年地区長に任命され、これまで町会の関わりをしてこなかった私は、何をすればよいのかわからず暗中模索の状態でした。

一年が過ぎて、やっと皆さんと親しくなってきたこの六月の日曜日、お囃子練習会を覗いてみました。公民館には入りきれないたくさんのおもたちでいっぱいでした。低学年は鉦、中高学年は篠笛と太鼓。心配そうに外から見守るお母さんをよそに、子どもたちは首に巻いたタオルで流れる汗を拭きながら、暑さをもろともせず、真剣に頑張っていました。公民館全体が活気に満ち溢れていて、とても感動しました。

四十二年前、町会先達たちがカセットテープのお囃子を流し、隣町から借りた太鼓を軽トラックに載せて、田んぼの中を自前の樽神輿を担いで始めたそうです。

子どもたちにとって『ふるさと』となるこの場所から巣立つこともあれば戻ってくることもあるでしょう。その時に『孤独』を感じないように、知っている誰かがいるという場所でありたいと願い、中央二丁目は今年度、行事を再開しました。

「子どもたちにとって故郷の思い出になれば最高！」霞会の先輩が語るその熱い気概に感服です。

春にフラワーアレンジメント教室を子どもたち対象に実施、夏休み期間は小学校の校庭で水鉄砲大会を実施しました。今回の花火のアーチ制作も親子で楽しみながら行いました。

町会の目指す原点が、正にこの祭りの姿に有ると確信しました。頑張って練習し本番を楽しむ子どもたち。それを次代へ確かに継ごうとする大人たち。皆さんの笑顔の後押しが少しでもできればと思います。

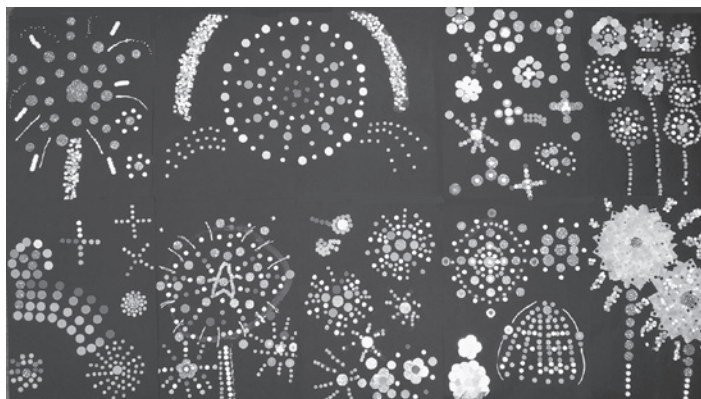
今後も親子で楽しみが感じられるように、無理なく細く長く育成会活動をしたいと思っています。

今年度の活動について

中央二丁目 育成会

コロナ禍を経て、これまで当たり前に行っていた行事について必要なこと、不要なことをそれぞれが感じた時期であつたと思います。サポートしていただいている町会の皆様も高齢化し、若い世代も忙しく、スムーズに行事を行うことが難しい時期になってきたと感じます。

その中で、これから大きくなる子



【花火】

制作者 桑原 美緒 桑原 咲希 境 七星 境 千歳 廣木 柊佑
細野 咲 間原 結生

同好会だより

着物で笑顔に。

一緒に楽しみませんか？

華の会会長 塚田 歩

華の会は、和装を楽しむメンバーが集まる同行会です。湊さよ子先生のお稽古により、現在は会員六名で活動しています。

お稽古の内容は、普段着、訪問着、浴衣、七五三、振袖、袴など、四季折々の着付けを習うことができます。初心者からベテランと、年齢層や着物歴はそれぞれで、その人に合わせて丁寧に教えていただけます。

自分で着る（自装）際は、帯は前で結んで後ろに回す方法のため、楽にきれいに帯を締めることができます。肩が上がない、後ろだとうまく結べなかった人でもうまく締めることができるようになります。

楽しみの一つが、メンバーが持つてくる色々な着物です。珍しい染めの大島紬、季節に合わせた粋な帯、お母様から受継いでリフォームした美しい着物、着物と帯と小物が絶妙

にマッチした見事なコーディネート・・・、同じものはひとつとしてなく、どれも毎回見て触れて楽しませてくれます。

会に入るきっかけは様々です。私事ですが、当時八十代の友人から浴衣の縫い方を教わったことがきっかけでした。着物の基本形状を知り、これをどうやって着るのか、縫っていくうちに着付けについても興味が沸いてきました。二十代半ばで着物の奥深さ、魅力にはまり、二十年近く、今では生活の一部でもあり、ちよっとした楽しみとして長く続けています。

華の会活動日は、月二回で第一、三土曜日午前十時～十二時です。入会ご希望があれば、まずは見学に来てください。着物姿で歓迎します。



楽しみましよう

「大正琴」

ふれあい琴の会 ひまわり
会長 齊木はつえ

私達は大正琴を楽しんでいるグループです。昨年十二月より一中地区公民館にお世話になっております。以前は、新治公民館で活動しておりました。現在、会員は六名、毎月第二・第四金曜日、午前十時から十二時まで牛久市の阿部先生のご指導を受けております。

大正琴は他の楽器に比べると簡単に出来る方だと思います。右の手で弦を弾き、左手でボタンを押す。楽譜は番号で表示され、指使いまで示されています。

先生のご指導はきれいな音を響かせ、曲の速度を安定させ、音の強弱を付けたり、トレモロを入れたり、美しく演奏することを事細かに教えてくださいます。時には冗談を言ったりし笑いがわき、和やかな時間でもあります。

現在、ソプラノ・アルト・テナー・ベースと四種の琴をそれぞれ担当し、アンサンブルとして演奏しています。それぞれが気持ちをひとつにして奏することが必要です。そ



のためには家での練習が必須です。大正琴は「琴」と違い短い楽器なので、テーブルに載せ簡単に始めることが出来ます。繰り返し練習していると

もよらずけつこうな小ワザを身につける必要があると感じます。月二回の活動日には、皆さんと合わせることに待ち遠しくなります。会つと皆でおしゃべりすることも、すごく楽しみなのです。曲目は、童謡・演歌・ポピュラーとほとんど揃っていて、自分達の好みで選曲しております。最近では大正琴は奥の深い楽器なのだとしみじみ思います。

コロナ前は、老人施設等で演奏し喜ばれました。又先日は茨城県大会で演奏してまいりました。体に気をつけて長く楽しみたいです。皆さんもぜひ「ボケ」防止のため、大正琴を楽しみませんか。

電城俳句会

累代の縁を辿る墓参かな

飯島 政和

饒舌の人と進まぬかき氷

野口 輝子

踏み込まずほどの距離二八そば

土井 直子

四年振り隅田の花火二万発

飯塚 紀美子

デイケアは体操時間蝉時雨

鈴木 みち子

短歌

三十度近き猛暑続きの夏なりき地球温暖化危惧する時代か

井上 寛江

熟れそめし細枝しなう柘榴なり^{ざくろ}摒うち伐られ屋敷さびしも

櫻井 雅江

霞ヶ浦の水面に延びる月光の道かがやかに今宵十五夜

瀬古澤 和子

信号を並んで待ちし若者は一陣の風遙か歩めり

齋藤 順子

特等席小さき窓の木漏れ日をいこいの場所に探す猫たち

桑田 今日子

緑濃きざくろの老木枝々が風に吹かれてゆり動くかな

岡部 恒文

自由詩

空

窓から最初に見えたのは青い空。

次に見えたのも青い空、そして窓一杯にひろがる黒い入道雲だ。

雨が近い知らせか。空の動きに、朝食をとっていても落ち着かない、自分がいた。

岡部 恒文

編集後記

今年の夏はとにかく暑かった。土浦の八月の真夏日は三十日、そのうち猛暑日は十四日。なんと最高気温は七月三十日の三十八・一度。今後こんな夏が続くのであれば、亜熱帯のくらしを学ばなければならぬ。

さて、今回はたくさんの方の原稿をお寄せいただき、編集委員一同嬉しい悲鳴を上げた。寄稿くださったみなさま、ありがとうございました。

(本号の編集担当者)

(A・Y)

新井 幸男／田中 久美子／梅木 逸夫／小野村 一博
小泉 裕司／高橋 瞳／山本 敦子／横山 光栄／渡辺 紀子

【お詫び】

前号四四号に掲載しました内容に誤りがありました。ここにお詫びして訂正いたします。

・一頁

「大町の道祖神」 杉山 弘之

誤 「上流の右岸脇」

正 「上流の左岸脇」